
妖恋～奴隷少女と狐面～

星見

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖恋〜奴隷少女と狐面〜

【Nコード】

N6537D

【作者名】

星見

【あらすじ】

富豪に奴隷としてあつかわれる少女。少女はある日、狐の面を被った男に連れ出される。そして始まる摩訶不思議な生活。 2010/01/04。別サイトにて大幅に設定を煮詰めて連載再開しました。パソコンサイトですが携帯でも閲覧は可能だと思いますので、興味のある方はどうぞ。

<http://shooting100star.web.fc2.com/doreisyoutokitunenmen/yourenmokuji.html>

第壱話：初

ある薄暗い世界に、全てを奪われた少女がいた。

少女の名は小羽。歳の頃は数えて16。

見目は絶世の美女というほどではないが、それなり以上には整っていた。

髪型は汚れた黒髪を後ろでまとめた簡単なもの。瞳も黒。

小羽は奴隷だった。

時は21世紀を迎えた今でも、社会の裏では人身売買がまるで当たり前のように行われている。

小羽は親により売られ、人買いに金持ちのところへさらに売られた。

そして、昼間は家政婦として、夜は。

そんな小羽には、小さな部屋が与えられていた。
ベッドと窓しかない、みすばらしい部屋だ。

小羽はそこから見える月をぼんやりと眺めていた。

今宵は満月だ。

見事な円の月を眺めるだけの時間を、小羽は何時間が過ごした。

シャリリン

シャリリリン

不意に、不思議な音が響いた。

「なんの音…？」

小羽は音の方向を見た。

小羽の部屋には鍵がかけられている。

冷たい鉄の扉。小羽を縛る、重く頑強な“檻”。

その扉を隔てた所から、シャリリン…と音がしていた。

「……？」

音は絶えず、響き続ける。

そして突然、扉が開いた。

ぎしぎしと音をたてて解放される鉄の扉に、小羽は軀を固くする。

こんな夜更けに主人が起きているとは思えないが、小羽は恐ろしかった。

シャリリリン…

シャリリリン…

開け放たれた扉の向こうには主人の姿は無い。
ふわりと風が吹く。

小羽の部屋は屋敷の離れにある。

この扉の向こうは少しの廊下の後は直ぐに外へと続いている。

ざっ…ざっ…

誰かの足音が聞こえる。

主人は革靴を履いているので足音はもつと鋭いもののハズだ。だが、この足音はどう聴いても革靴ではない。

どちらかというと、草履などの柔らかな音に近いだろう。

「だれ……ですか……？」

小羽の声に足音の主は答ええず、ゆっくりと歩を進め続ける。

「迎えに来た。小羽」

そんな言葉が響いた。低く耳に快い声だ。

闇の奥から現れたのは男だった。

小羽の主人ではない。視たことのない男だ。

男の姿を見て小羽は軀を固くした。

何故なら男は面妖な狐の仮面を身につけていたからだ。

薄暗い部屋に浮かび上がる男の姿は奇異なものだった。

精巧に作られた狐面に顔を隠す、身長の高い男。

深い夜の色をした袴姿に白の羽織を着ている。純和風の服装だ。

「迎えに来た、小羽……」

もう一度、低音で男が言った。

「……あなたは……？」

狐面の男を凝視して小羽が言った。

「おまえを迎えにきた」

再びそう告げて狐面は小羽に歩み寄った。

「迎え……？」

「“籠の中の鳥”でいるか、俺とここを出るか、選べ」

ずっと差し出した男の手に、小羽は困惑する。

「私はここの主人に買われた奴隷です……。私の意志で決めること

はできません……」

悲しげに小羽は言った。

「平気だ。おまえの主人には話を通そう」

「ですが……」

「決めるのはおまえだ」

「……………」

得体の知れない狐面の男。そんな者を信用することはできない。

だが……。

「……あなたが私をお買いになられたのですか？」

小羽は二度も売られた。

ある日、突然。

今の主人が小羽に飽きて売り飛ばそうとしても不思議ではなかった。

「……おまえがそう思うならそれでもいい」

「そうですか……。わかりました……」

ゆっくりと立ち上がり、小羽は深く礼をした。

「ついてきなさい」

それだけ言つと狐面の男は背を向け、闇へ溶けていく。
その後を追つて小羽も部屋を後にした。

シャリリリン

シャリリリン

再び響く金属の音色。

「……………っ!？」

小羽はヒドく驚いた。

出口で待っていたのは幾人もの和服の男たち。

ズラツと二列をなし、手には淡い橙が灯った提灯と錫杖を持ち、
それらが今までの音色を鳴らしていた。

さらにその列の間にはこれまた古風な籠がある。

「雨……………」

不意に、雨が降ってきた。
小粒の霧のような雨だ。

「……………」

「どうした小羽？早く来なさい」

籠の手前にたつ狐面が言った。

「……………はい」

意を決して小羽は狐面の下に歩み寄った。

霧の雨が小羽の着ている薄いワンピースを濡らす。

「籠へ」

簾を上げて狐面が促す。

「あ…………、めつ、滅相にもございません。私などが入ったら汚れて
しまいますっ」

「構わない。おまえの為に用意したのだから」

「ですが…………」

「主の命は聞けんのか？」

狐面がからかうような声を紡ぐ。
小羽は暫し躊躇したが結局。。

「……わかりました。失礼いたします」

「ああ」

小羽は籠へ乗り込んだ。

籠なんて乗ったことも見たこともない小羽には、籠がとても新鮮にみえた。

内部は外観より意外と広く、ゆったりとしている。

「あの……」

「なんだ？」

狐面も籠へ乗り込み、ゆるゆると出発したころ、小羽は疑問を口にした。

「あなた様のお名前を教えてくださいますか？」

「ああ…、まだ名乗ってもいなかったな…。有火^{ゆうび}だ」

「有火様…ですか」

「様などつけなくてもいい」

狐面はうつすらと笑いのこもった言葉を紡いだ。

「ですが、あなた様は私の主ですから……」

小羽は慌ててそう言ったが、狐面は不意に来ていた羽織を脱いだ。

「着ろ。もう着いた」

「えっ？……」

小羽はきょとんと眼を丸くした。

まだ出発してから十分も立っていないハズだ。

だが、ゆっくり揺れていた籠はやんわりと動きを止める。

そして再び、あの錫杖の音が響いた。

「降りるぞ小羽、その姿では少し寒いだろうから羽織を着なさい」

さきほどまで着ていた羽織を小羽の肩にかけて有火が言う。

そして有火はするりと籠を降りていった。

「あっ……」

しばし茫然としていた小羽だったが、肩にかけられた男の羽織に顔を赤くした。

小羽の服は薄いミニのワンピースだけだ。しかもかなりくたびれた。

雨でほんのりと湿っているソレに、有火は不憫に思ったのか、そ

れとも見かねたのか

「……………」

まだ温もりのある羽織を押さえ、小羽は籠を降りる。
さああ、と湿った風が小羽をなぜる。

「ここは……………！！」

辺りを見渡して小羽は眼を見開く。

朱色の、大きな鳥居。

その向こうには純和風で大きな屋敷が見える。

「此处が俺の家だ」

淡々と有火は言う。

そして鳥居までの路を錫杖と提灯を携えた男たちが並び、灯りの
路を作っている。

「さあ行くぞ」

それだけ言う和有火は鳥居に向かって歩き出した。
小羽も有火を追って歩き出す。

不思議な光景だ。

男たちの提灯の淡い橙の灯りが闇にぼんやりと浮かび上がり路を照らす。

まるで蛍のようだ、と小羽は思う。

反射した橙が星のない空へ登り、淡く輝くのだ。

やがて朱色へたどり着く。鳥居をくぐると屋敷が一層近くに見えるてくる。

「さあ、ここが俺の屋敷だ」

やがて、仰々しい列を終えて小羽は屋敷へとたどり着く。

古く歴史を感じさせるが綻びや傷みは感じさせない、見事な和の屋敷。

宵の中ではあまり見えないので全体は判らないが、小羽が先ほどまでいたあの屋敷より明らかに大きく、見事だ。

小羽は有火に促されるまま屋敷へと入る。

内部は和風というだけではなく、“旧い”ようだ。

それが小羽の受けた第一印象。

照明には蝋燭を灯した燭台で、廊下をユラユラと照らしている。

有火は小羽を待ってから廊下を進む。

やがて、一つの部屋の前で有火は止まった。

「今日はここで休め。疲れただろう」

通された部屋は広い畳の大部屋だった。

淡いオレンジの光を灯す燭台が暗い部屋を照らしている。

部屋の中央には布団が用意されており、枕元には白い浴衣のような着物が畳まれている。

「それに着替えて寝るといい。ゆっくりとな」

「は、はい……。ありがとうございます」

振り返ると既に有火の姿は消えていた。

襖も閉じられており、部屋は静かだ。

「どういうところなのかな」

服を脱いで寝間着に袖を通す。白の小袖のような着物だ。

本当に不思議なところだと、小羽は今夜を思い起こす。

満月の夜に突然現れた狐面の男。

錫杖の音色に淡く灯る提灯。

たった数分で小羽をここまで運んだ籠。

深い森に囲まれた鳥居と広い屋敷。

有火がかけてくれた羽織を丁寧に畳んでから小羽は布団へ入る。

深夜に起きた出来事なので布団へ横になると直ぐに眠気が襲ってきた。

これは現実なのか、本当はただの夢ではないかと思い、小羽は瞼を閉じる。

ゆっくり優しく、眠りは小羽を包んでいった。

続

第壱話：初（後書き）

この話は同時連載の『闇狩り』とストーリーがリンクしていきます。

第貳話：屋敷

翌日。小羽が目覚めるとすぐに体を起こした。

広い部屋の中央に敷かれた布団にいる自分。やはり夢ではない、現実だと再確認する。

体を起こして布団から出る。その時、襖が静かに開いた。

「おはようございます、小羽さま」

そこに現れたのはまだ幼い童女だった。

年の頃はまだ七つか八つほどだろうか。

黒髪のおかっぱに薄い桃の着物。そんな、おおよそ現代的ではない格好の女の子。

「着替えをお持ちしました」

感情をあまり込めない、淡々とした言葉で彼女は続けた。

心なしか、小羽を見据える黒の双眸には険しい色が見え隠れしているようにみえる。可愛らしい容姿には似つかわしくない表情だ。

「ありがとうございます。あの……、あなたは？」

「鈴と申します。あなた様のお世話をさせていただきます」

鈴と名乗った女の子はやはり淡々と答えた。

「私の世話……ですか？」

「はい、有火様から申しつけられました」

鈴の言葉に小羽は混乱する。

自分は買われたハズだ。それなのになぜ世話を受ける？
本来ならば逆で、私が世話をしなければいけないのに……。

小羽は頭を抱えて考える。さながらかの有名な絵画、“叫び”のように、腕で顔を押さえて。

「小羽様、なにを自問自答しているかは存じませんが、お着替えをおすませしていただけませんか？」

鈴の淡々とした言葉が響く。

「ご、ごめんなさいっ」

慌てて謝り、鈴の差し出した着物を受け取り小羽は更に焦る。赤地の、百合の刺繍が入った見事な着物だ。そしてかなり高そうにも見える。

かなり見栄えするものだったが、小羽は狼狽した。

「あの……、私着物着たことないんです……」

それはなにも着物だけではない。小羽は自由に服を着ることを許されたことなど一度もなかった。もちろん着物など触れたことすらない。

「……………」

「……………あの……鈴さん？」

いきなり黙り込んだ鈴に小羽は焦った。

（怒らせてしまったのかな……………）

そう考え小羽は更に焦る。

「自分で着脱できない服を普段着にするのは難儀ですね。わかりました。少々お待ちください」

すると淡々と告げて鈴は頭を下げた。そして襖に消える。

数分後、鈴が持ってきたのは朱色の着物だった。
今着ている小袖と近い、ゆったりとした物だ。
帯で留めるだけだから知識のない小羽でも簡単に着られる。

「ありがとうございます、鈴さん」

見事に小羽の体にあうサイズの着物に小羽は笑顔で頭を下げる。
顔をあげた小羽の目には戸惑っているような鈴の表情が映った。

「……鈴さん？」

「あなたは変わっていますね。“人間”なのに……」

「えっ……？」

「それとも……」

「あの……鈴さん？」

一人ごとのように呟く鈴に小羽は戸惑う。

「すみません。ではこちらへ。洗面所へ案内します」

鈴は棒読みのようにそう言って襖を開けた。

小羽も慌てて後を追う。

案内されたのは中庭のような所だった。

井戸、という物を始めて見た小羽は鈴が井戸から水を汲むのを凝視している。

「どうしました？」

桶に水を汲んだ鈴が小羽の視線に気づき言う。

「いいえ……、井戸ってそうやって使うんだな、て思ってた……」

「……井戸以外にどうやって水を汲むんですか？川も少し遠いんですよ」

「えっと……蛇口？」

「蛇口？なんでですかソレ？」

「こういう、変な形をした取っ手があって、ひねると水がでて……」

「ひねると水？どうしてですか？」

「ええっと……水道管が通っていて」

「水道管ってなんですか？」

「あつ……水が通る所で……その……」

矢継ぎ早に蛇口について質問され、小羽は言葉に詰まる。
ちようどその時、作務衣姿の男が通りかかった。

「どうした鈴、お嬢ちゃん」

藤色の作務衣を着た男。

見た目の年は四十代半ばあたりか。
坊主に近い短髪の色はみごとに白。目はやや黄色かった琥珀で
人の良さそうな屈託のない笑みを浮かべている。

「ん、お嬢ちゃん見慣れないなあ？新入りさんかい？」

ざりつと草履を響かせ作務衣の男が言う。

「はっ……はい！小羽と申します」

物凄い勢いで頭を下げた小羽に男は目を丸めたあと、やんわり笑
う。

「そんな堅くならんでもいいぞ。自分は八雲だ。よろしくな小羽」
「はいっ！よろしくお願ひします」

再び物凄い勢いで頭を下げた小羽を見て八雲はからからと笑い声をあげた。

「面白い娘だなあ。それで、小羽はどこに配属されるんだい？ちなみに自分は板前だぞ」

「あの、まだ判らなくて……」

「判らない？」

「はい。昨日突然ここに買われた者で……」

小羽の言葉に八雲は目を見開く。

「昨日……。なるほど、お嬢ちゃんは 現世 か」
顎をかきながら八雲は言う。

小羽は聞き慣れない言葉に首を傾げた。

「……現世？」

「ああ、こつちの話だよ。

ところで、昨日つてことは主は狐面つけてただろ？」

「はい」

「今日は取ってるよ。これから行くんだろう？なかなか男前だぞ」
からかうように八雲が言った。

「どんな方でも私の主です。誠心誠意仕えさせていただきます」
対する小羽はそう答えた。

（なるほど……。ほんとにおもしろい娘だなあ）

心中でそう思った八雲はぽんと軽く小羽の肩を叩いてからゆっくり井戸に向かっていった。

「小羽様、お急ぎください」

不意に鈴が言う。やはり妙に淡々としている。

「あつ……はいっ」

水の桶を受け取って慌てて小羽は顔を洗った。水は冷たく、僅かに漂っていた眠気も一瞬でかき消えた。

「此方です」

先へ歩く鈴が立ち止まった。

「有火様がお待ちです。どうぞ」

それだけ言つと深々と頭を下げ、鈴は下がった。

「……………失礼します」

小羽はゆっくり障子に手をかける。

からからと乾いた木の音をたてて障子は開く。

開いた先の部屋には何もない畳の部屋で、更に奥に襖の区切りがある。

小羽が部屋へ入ると入ってきた障子が閉まった。おそらく鈴が閉めたのだろつ。

「……………有火様？」

襖の奥にいるのだろつか、小羽は襖越しに声をかけた。

「こつちだ。入れ」

昨日聞いたあの低い声が襖の奥から響く。

「は…はいっ」

すらつと滑らかに襖は開く。

奥の間。それなりに広い部屋で丸窓のある書斎のような所だった。右手の壁には本棚が三つほど並べられており、和綴じの書物がびっしりと納められている。

左手の壁には飾り弓や刀、そしてあの狐面がかけられている。

そして部屋の奥に書き物台があり、袴のような和服姿の男が向かっていた。

「きたか」

コトリと筆を置いて男は振り返る。

「よく…眠れたか？」

狐面は

「…はい」

付けてはいなかった。

短い髪は深い森のような深緑色。

やや切れ長の双眸は銀灰。すっと通った鼻筋に形のいい顎のラインをした、二十代半ば程の男だ。顔立ちはかなり端正な部類に入るのだろうが、ほんの少し表情が堅めで険がある。

「座るか小羽。座布団はそれを使うといい」

小羽のすぐ近くに無造作に置かれたままの座布団を指差して有火は言った。

「いえ、平気です。失礼します」

座布団は使わず小羽は畳に座った。

「そつか……。聞きたいことは？」

「……たくさんあります」

「……なんだ？」

「ここはどこですか？私をなぜここにつれてきたのですか？」

小羽の知りたいことはこの二点。

「此処は俺の家であり、おまえの当面の職場だ。」

おまえを連れてきた理由は不問だ。聞くことを禁じる」

僅かに決まり悪そうに苦笑して有火が言う。

「……………そうですか」

抗議も不服さも見せず、小羽は答える。

もちろん納得はしていない。

だが、それでよかった。

納得はいらない。ただ従え、と小羽は幼少の頃より教え込まれて生きてきた。

「……………恐ろしく…ないのか？」

「なににですか？」

「突然連れてこられてだ」

「……………少し…戸惑っています」

暫し考えるように沈黙を空けてから、ゆっくり小羽は答えた。
その瞳には迷いは無い。

「ですが、あなた様が私の主であるのなら、私は誠心誠意仕えさせていただきます」

そう言い終えて小羽は頭を下げる。

「……………そうか」

ゆっくり、有火は笑みを広げた。

「正確に言えばおまえは客だからな、おまえが望むのなら“外”での暮らしができるよう都合するが？」

「いえ、滅相もございません。此処に置かせていただだけませんか？」

「……………わかった。ではそうしよう。」

だが、ここ暮らしに慣れるまで暫くかかるだろう。鈴におまえのことを頼んでおいた。なにかあれば鈴にきくといい」

「はい、ありがとうございます！」

笑顔で有火に答えた小羽。屈託のない、自然な笑みだ。それを見た有火は少し遠い目をした。もちろん小羽が気づく訳はないが。

「……………」

「有火さま？」

「いや、なんでもない」

「そうですか……。あつ、では私はさっそく仕事にかかりますね！」
「いうが早いか小羽はすつくと立ち上がる。」

「では、失礼します」

再三礼をして小羽は奥の間を後にしていった。

小羽の消えた襖を銀の目で見つめながら、深緑の髪のはきはいた。
「……………これで俺は『約束』を果たせたな」

「あれ？」

奥の間を出てから小羽は気づく。

「結局私、なにもわからなかった……………」

この屋敷のことも、自分が此処にいる理由も、有火についても、
何一つ。

「そのうち判るかな……………」

悲観してても仕様がなない。

世界は動く。

時間も動く。

小羽は立ち止まらない。

右も左もわからない世界で、小羽の生活がいま始まろうとしている。

続

第貳話：屋敷（後書き）

さっそく狐面は外れました。最初からひっぱるつもりもなかったんですが、とりあえず『もつと引っ張れよ』という方にはすいません。狐面は今後の物語でかなり重要な意味をもってきます。お楽しみに
（サ エさん風）

第参話：朱波

「…………あの」

「なんだい？小羽ちゃん」

有火に挨拶した後、小羽はとりあえず屋敷を回ってみた。
かなり広い。純和風の屋敷。電化製品が一切なく、働く人々も皆和装だ。

まるでタイムスリップしたかのような錯覚を覚えた小羽は……

「今って……何世紀ですか？」

藤色の作務衣を着た中年男、八雲に聞いてみた。

「21世紀に決まってるだろ」

八雲はあっさりとそう返す。

「そうですよね……」

少しホッとした小羽は安心したように息をはく。

調理場では八雲がシャリシャリと包丁を研いでいる。

「まあ、小羽みたいな 狭間 からきた子にはかなり古いだろう」
ぺしぺしとかまどを叩きながら八雲は笑う。

調理場にもやはりコンロや冷蔵庫は無い。あるのはかまどや七厘などだ。

だがそれ以前に小羽には気になることがあった。

「狭間ってなんですか？」

聞き慣れない単語に小羽は首をひねる。

「狭間っていうのはおまえさんが今までいた世界。ちなみにここは異世 っていうんだ」

「ことよ……？」

これまた聞き慣れない単語が出て来た。

というよりわからないことが多すぎて小羽は反応に困っていた。

「……………」

「どうした？」

「いえ……その」

ききたい言葉が喉元につかえて小羽は言葉を濁す。

「……なるほど、まだわからないのか」

言いづらそうに伏せる小羽をみて男は閃く。

「まっ、仕方ないなあ。昨日の今日だし。主も鈴もなにも教えなかっただろう？」

「……教えなかった？」

「ああ。例えば、俺たちのこととか」

ぎしつと小羽の座っている長椅子の隣に座る。

「……………」

「んー、まっ、それは置いとして」

置いとしての動作をして八雲がニカツと笑う。

「仕事はするのかい？」

「はい。有火様はしなくてもいいって仰ってましたけど、置かせてもらう以上、迷惑にならないようにしないと……」

「そんなに気を使わなくてもいいんだがなあ……」

八雲は白髪の坊主頭をかく。

「……そうだあ。することが決まってないんなら買い出しに往くんだが一緒に往くかい？」

「買い出し……ですか？」

「ああ、こっから少し歩いた所に街があつてな。いつもなら鈴と往くんだが一緒にどうだい？」

「いいんですか？」

『もちろんだ』と八雲は答えて立ち上がる。

調理場の窓から覗く空は青。日差しも申し分なく、いい春の一日になりそうだ。

++++

桜の蕾がほころび始める。

まだ冷たい春の風にふかれながら三人は歩いていた。

「桜ももうじきだなあ」

道沿いに並ぶ桜並木を眺める八雲が言う。

「花見の時期だな」

「お花見するんですか？」

「ああ、屋敷の庭でな。酒のんで旨い飯くって騒いでくいつ、と酒を煽る仕草を見せる。

「おお、そっぴやああいつらもそろそろ来る頃だな」

思い出したように八雲も笑う。

「あいつら？」

「毎年花見に来る客だよ」

「お客様が来るんですか？」

「ああ、まあ有火……じゃなかった、主の友人でな。まあ、悪友っていった方がしっくりするんだがな」

「さああ、と風が走る。

のんびりと世間話をする二人を置いて黙々と歩く少女が振り返る。

端正だが無表情な顔の少女、鈴はどこか冷めた声で言った。

「着きました」

小さな、小高いこの丘から一望できる町だ。

町の全貌を一目で伺えるこの丘で小羽は眼を見開く。

小さな川に隣接して立ち並ぶ、古風な造りの家屋たち。電柱や洋風な建物は一切なく、本当に小さくて古い。

「朱波 しゅば という町さ」

八雲が言う。

「小さいがいいトコロだ」

それだけ言うとしてと八雲は丘を降りていく。下り坂には石造りの階段が敷かれていて神社や寺を思わせる。

町へ向かう二人を追って、小羽も階段を下っていった。

++++

「すごい……」

それほど人が行き交う訳ではないが、賑わいはある。

町並みも、人々も和装。現代的なモノは何もない。

「少し見てみるか？」

食品店と思われる店で醤油と小麦粉を買った後、町の景色を眺める小羽を察して八雲が言った。

「えっ？……ですが…」

小羽は躊躇う。

「平気だぞ。一旦自分と鈴は屋敷に戻るから、それまで見ているといい。なあ鈴」

「……私がかまいません」

肩に小麦粉を担いだ八雲と醤油瓶を抱えた鈴が言う。

「ありがとうございます」

「はいよ。あつ、小羽お金持ってないだろう？　鈴ー」

「え、いいいいんです！　お金なんて」

慌てて首をふる小羽を無視して鈴はチリメンの小銭入れを押し付けた。

「まあ、貰つとけ。因みにその甘味屋の団子は旨いぞ」

そう言つて八雲はきびすを返す。鈴はチリメンの小銭入れを押し付けた後さつさと歩いていつていた。

「私…嫌われてるのかな…」

鈴の態度は明らかに小羽を避けている。

おかつぱの少女の後ろ姿を見送つて、小羽はため息をこぼした…。

さらさらと流れる優しい流れの川に沿う古風な町なみ。

町を歩くことすら“初めて”な小羽はひたすら眼を輝かせる。

「すごいなあ」

通りかかった飴売りらしき露店。

琥珀のように輝く、触れれば砕けてしまいそうな儚い飴細工にいつい小羽は釘付けになる。

「どうだい嬢ちゃん、きれーだろ？」

着流しを着た露店の主人が声をかける。

「はい！　食べるのが勿体無いですね」

「そだろー。嬢ちゃん可愛いからサービスだ。味見してみるかい？」

そう言つて店主は棒に絡めたべっこう飴を差し出した。風見鶏のような形をした甘い香りをほんわりと放つ飴だ。

べっこう飴に舌鼓をうつ小羽は飴売りと少し世間話をした。

「そうか。まだ来たばかりなんだな」

「はい」

「どこにすんでんだい？ 離れ？」

「えっ……、あの……あそこです……？」

「へっ？うそお！あそこって有火さんの屋敷だろ？！」

口と眼をあんぐりと開けて店主は驚いた。

「あの……やっぱリスゴいんですか？」

「そりゃあそうさ。朱波では一番の力を持つてるからな。ってことは嬢ちゃんもしかして……」

「？」

「……あつ、いや、なんでもないよ」

中途半端に言葉を濁した店主に小羽は首をひねる。

「あの……っあ」

ドンッ、と背後に何かが衝突して小羽は前のめりに倒れる。

「つと、嬢ちゃん大丈夫かい？」

「は……はい」

店主の声に小羽は答えて立ち上がる。

けがはない。すこし着物の裾が汚れただけだ。

「ごめんなさい。大丈夫ですか？」

ぶつかつた相手と思しきの声に小羽は振り返つた。

そして……

「きゃああああっ?!」

叫んだ。

「嬢ちゃんどうした?!」 飴売りの言葉が続く。

「き……きき……」

その人物に指をさして小羽は言葉をつつかえさせる。

「……き……狐っ!」

そう、小羽が衝突したのはまさに“狐”だった。

フワフワした、金茶色の毛並みに三角形の大きな耳。線のように

細い眼をした、丸みのある顔。

身長は低く、小羽の腰くらいかも少し低い。白と黒の市松模様の着物をちんまりと着て、怯えたように耳を隠す手は狐のそれと同

じだ。

「なっ……なに？」

ピクピクと小羽の表情を伺いながら狐は言った。

「あ……えっ……」

狐が二足歩行して喋ってる……

小羽は一瞬思考が停止しそうになるが、自身の頬を引っ張ること
でそれを回避した。頬の痛みは現実だ。

「あの……あなたは」

「あ……小羽……です」

なぜか名乗っていたが、小羽の思考はいろいろな方へ駆け巡って
いた。

続

第参話：朱波（後書き）

狐くん登場！

第肆話：妖

さらさら　さらさら

緩やかな川の流れに沿う河川敷。

春草の柔らかな感触。

甘い、飴。

暖かな、太陽の輝き。

そのどれもが、小羽という少女にとっては新鮮な刺激だった。そしてまた一つ、不思議な存在を識る。隣りを見る。

そこには狐の少年の姿がある。比喻ではなく、確かに狐なのだ。三角形の耳。フワフワした金茶色の体毛。曲線のように細い眼。髭に鼻、と顔は狐。

市松模様の着物を着た、子供のような背丈。

狐のにくきゅうそのままの手にはべっこう飴の棒が器用に握られていた。

「さっきはごめんなさい。いきなり叫んで……」

「う……うん……」

小羽の言葉に狐は頷く。少し怯えているように、着物から飛び出している尻尾は力無く震えている。

「あの……」

もじもじとべっこう飴を両手でいじりながら躊躇いがちに狐が切り出した。

「人間……なんですよね？」

「う……うん……。……あなたは……。妖……なんですよね……？」

両者は切れ切れに言葉を繋ぐ。

「ビックリした。不思議な所だとは思ってたけど、まさか妖の町だったなんて…」

そう呟く小羽の表情は言葉とは裏腹に晴れやかなものだった。彼らはヒトではない存在。アヤカシ。

ヒトとは異なる姿をしたモノたち。異世に在るこの朱波という町。

狐の少年から知らされたのは、この町にはヒトはいないということとだ。

目の前に見せられては否定もできない。むしろソレをすんなりと受け入れている自分に小羽は少し驚いていた。

「そ…そんなに驚いてないんですね…。普通の人ならとてもビックリするの…」

「驚いてるけど、納得はしてます。不思議なことがあったから…」

思い返す。宵の刻。

狐面を被った主人の姿。

「みんな…」

「うん。妖だよ。人は多分、お姉さんだけ」

「あの飴売りさんも？」

「うん。普段はみんな人の姿に化身してるんだ。人は器用だから…」
尻すばみに言った狐は己の手を見る。

「…僕は力が弱いから化身できないんです」

くたり、と、耳が力無く垂れる。

「……あの」

「？」

「私は小羽っていいいます。あなたの名前、教えてくれませんか？」
他意の無い、柔らかい笑顔をみせ小羽は言った。

「えっ……あの……そのう……」

しかし小羽の問いに狐は何故かあたふたと慌てている。
何か困ることを言ったのか、狐の慌てぶりに小羽は戸惑った。

「あの…私何か悪いこと言いました?!」

「うっん、そうじゃなくて……そのう…笑わない?」

「はい」

頷く小羽を見て、狐は暫し迷ったあと、小さく告げた。

「……嵐^{あらし}」

小さく呟くような声。狐は恥ずかしそうに耳を手で隠した。

「嵐さん。素敵な名前ですね」

「ほんと!?!」

「はい」

嵐はぱつとはねおきて照れたように顔を赤くする。

そんな様子が可笑しくて、小羽は小さく笑っていた……。

「楽しそうだな」

ふわり、と風が1つ吹く。その風に言葉が重なった。

聞こえた背後からの声に振り返ると、藤色の作務衣が視界に映る。

「八雲さん」

「迎えに来たぞ」

作務衣の懷に手を預ける八雲の少し後ろにはいつも通り無表情な

鈴が佇んでいる。

「よく此処にいるってわかりましたね」

この場所は2人と別れた場所から少し離れていた所にある。

「まあな、『風に聞いた』んだ」

八雲は悪戯な笑みをみせる。

「?」

「さて、往くか。そっちの坊主は?」

「嵐さんです」

狐の少年に気付いた八雲に小羽が言う。するとなぜか八雲は琥珀の眼をふせて小さく呟いた。

「……そうか」

「……」

八雲の呟やきに、嵐は俯く。恥ずかしいのか、悲しいのか、小羽

には判断出来なかったが、兎に角そう見えた。

「あの……」

二人の態度に戸惑う小羽の遠慮がちな声に何事もなかったように八雲は笑いながら言った。

「ああ、悪い。さて、帰るぞ。じゃな、坊主」

くしゃり、と嵐の頭を撫でて八雲は振り返る。

「あの、嵐さん。今日はありがとうございました」

ゆっくり歩いていく藤色の後ろ姿を黙って見つめる訳にもいかず、小羽は嵐に口早に告げて後を追った。

「またね、小羽姉ちゃん！」

背に届いた声に歩きながら振り向いて手を振り、二人の後を追って歩いていった。

ほんのり香っていたべっこう飴の甘い残り香は風に流されていた……。

++++

とつぷりと浸かった夜の帳。宵空には欠け始めたまだ丸い月が明るく輝いている。

「そつかー。妖のこと知ったのか」

ざくざくと山菜を刻む音に重なるように八雲の声が響く。

「はい……、ちょっとびっくりしました」

桶に汲んだ水で新鮮な野菜たちを洗う小羽が応えた。

夕餉の支度。八雲以外にも何人かの板前が忙しく動き回っている。客”と言われたものの、黙っているのはできず小羽は無理を言っ

て仕事を貰ったのだった。

「怖くないのか？ 自分らはヒトじゃないんだぞ？」

包丁の音がやむ。

伏せていた自然を上げると、そこには真摯な表情の八雲がいて、小羽は口をひらく。

「怖くないですよ。……私は……ヒトのほうが怖いです……」

「……そうかあ」

何ともいえない、思い雰囲気に似合わない、綻んだ笑みを八雲は見せ、白髪の手をかけた。

見た目は間違いなく40代の中年だが、笑うとどうも幼く見える。「あー、うん。そうだな。此処はいいところだ。だから、心配すんな」

励ますような、ちょっとからかうような言葉に、小羽は微笑んだ。それは、こころからの笑みだった。

++++

夕餉の支度を終え、春の風が快い開け放しの縁側で、小羽は少し休んでいた。

夜の空には今まで見たこともない程美しい星空が広がり、瞬いていた。

縁側から見える広い庭。大きな錦鯉が悠々と泳ぐ池や蕾がもうじき綻ぶ枝垂れ桜の古木が見える。

さあ、と少し肌に冷たい風を浴びて小羽の黒髪はゆっくりと舞う。

それをかきあげた時、床板が小さく軋む音がして振り返った。「涼みか？」

深い山々を思わせる深緑の髪に、灰に近い銀の切れ長の双眸。落

ち着きのある薄茶の袴姿に羽織をはおった男、有火だった。

「すこし…庭を見ていました」

「そうか…」

有火もまた、小羽にならない庭を眺めた。

「……町を見てきました。いい所ですね」

「ああ」

「べっこう飴って美味しいんですね。はじめて食べました」

「そうか……。甘いものが好きなのか？」

「…わかりません。そんなに食べたことはありませんし……、でも、今日は楽しかったです。凄く」

「……そうか」

そんな、他愛のない話が穏やかに続く。

再び春風が吹く頃に、風にのって夕餉の食欲をそそる香が流れてきた。

「あ、もう晩御飯ですね」

「…そうだな」

「私準備してきますね」

深く御辞儀をし、小羽は提灯や燭台で淡く照らされた廊下に消えていく。

男は闇に紛れてゆくその背を見つめ、それから視線を星空に移して呟いた。

「…『花』……。俺の役目は終わりか…？」

誰に向けた訳でもない、低く小さなその呟きに応える者はいない。
男は切れ長の瞳を閉じ、静かに息をはいた……。

続

第伍話・溜息（前書き）

みんな溜息ばっかでなんかくらい……

第伍話：溜息

「あと二秒待つんだ！……………今だっ！」

「はいっっ」

厨房の一角。茶飲み用の陶器や各種の茶葉が揃えられたスペースのことだ。そこには真剣な表情で茶を煎れる小羽の姿があった。一通りの家事は対応できた小羽だったが、此処にはガスも水道もない。お茶のために一から湯を沸かすのも一苦労といったものだ。

白磁の湯呑みから立ち上がる湯気がその一角に漂う。

茶の注がれた湯呑みを取り、ずずつ、とすすつたのは八雲であった。

一口含み、茶の具合を確かめる。

「まーまーだな」

小羽のいれた茶は苦みは少なく、呑みやすいが言い換えれば味が薄かったのだ…。

++++

しゃりしゃり、しゃりしゃり…。

硯の上に墨を溶いていく。

向き合つのは高級和紙。姿勢を正して毛筆を握るのは鈴という少女。

筆に墨を含ませ、さあ書こうという所だった。

からり、と乾いた音をたてて障子が開き、小袖に近い和服を着た少女が入ってきたのは。

「あの…、鈴さん。お茶いれたので、呑んでもらえませんか？」

躊躇いがちに差し出した盆には湯気のたつ湯呑みが載っていた。

「……………あなたがいれたんですか？」

「はい」

机に置かれた湯呑みをしげしげと見つめてから鈴が言った。

「……………」

つい、と細い指が湯呑みにからむ。ゆっくりと湯呑みを持ち上げて鈴は一口茶を含んだ。

やや間があつてから鈴は相変わらず無表情に口を開いた。

「……………薄いです」

「やつぱりですか？……………よし、もっと練習しますね」

「……………変なヒトですね」

屈託のない笑顔を向ける小羽に、鈴はかわらぬ無表情で、だが複雑そうな声色で言う。

「わたしたちは妖。あなたのようなヒトとは違う。…怖い筈です」

視線は薄いと評価された茶に落としたまま、あくまで淡々と鈴は続ける。小羽には、それが”創っている”のではないかと思えた。

「……………わたしはヒトが嫌いです。ヒトは酷くて狡いイキモノだから

……………」

「鈴さん……………」

「……………出ていってもらえますか。今から書状書かなくてはいいないので」

冷たく突き放すその言葉には有無をいわさぬ圧力がある。小羽は何も言えず、黙って部屋を出ることしかできなかった……………。

障子を閉める刹那に見えた鈴は、湯呑みを握ったまま座って静かに佇んでいた。

風が心地いい。

格子窓から流れる風にそう感じて八雲は素足に草履をつっかけ外に出た。

ざざざざ、としだれ桜の長く垂れる枝が風に揺れる。開花まではあと一週間もないだろう。

短い白髪を掻きながらくああ、と欠伸を一つして、八雲はそのまま仰向けに草の上に転がった。

このまま寝てしまおうか、と思った所、反転する視界に深緑の髪が映り、八雲はひらひら手を振った。

「どうした主」

袴姿にボタンシャツの出で立ちで現れた主に八雲は笑みを向ける。

「…少し退屈だな。八雲殿は？」

「おんなじだよ。暇で暇で」

「……小羽はどうだ」

有火は寝転がる八雲の隣に腰を下ろす。

「まだ数日だからな、でも、いい子だよ。自分たちの正体を知っても気にしないようだし」

かか、と笑って八雲は座り直す。

作務衣の懷から煙管入れを取り出し、マッチで刻み煙草に火をつけ適当に吸い出した。

「なあ。……有火、小羽が……」花”なんだろ？」

「……ああ」

「……はあ。お前も難儀な奴だな。まあ、自分は板前として働く身だから何もいわんが…」

漂う紫煙を風がキリ散らす。

有火は黙って桜の木を見上げた。

「……今日来るのか？」

「ん？ ああ。郵便か。そうらしいな。今年も想也たちを呼ぶんだろ？」

「ああ。一応景都と酒華にも出すつもりだが」

「酒華は来ないだろうなあ、忙しいだろうし。景都は捕まるか？」

「さあな」

また一度風が吹く。有火は草の上から立ち上がり八雲に一瞥してから屋敷へ歩いてゆく。

八雲はその背を眺めながら紫煙をはきだし、己も立ち上がった。

「……輪廻か。まったく、面倒な仕組みだ」

一人つぶやく男の目は遠き日が回想されていて、八雲はそんな己にため息をはいた……。

×××××

はあ、と本日何回めかになるため息を零し、小羽は縁側に座って庭を眺めていた。

庭はいつ視ても素晴らしく見事だが、それも小羽の心を晴らしてはくれない。

「嫌い……か……」

鈴の言葉が頭に反芻され、小羽は頭を抱えた。

嫌われる。それには慣れている筈だった。

思い帰されるのは、何時かの母の言葉。

聴きたくもない、でも、決して耳から、記憶から、全身から離れてくれないあの言葉。

私はあんたを………

「ッ」

反射的に掌できつく着物を握り締めていた。ささやかな抵抗もとれるその行動は、なんの意味も持たない。

「……………やっぱり、此処でも私は……………居てはいけないのかな……………」
ふわり、一陣の風が舞う。

穏やかな風はゆつくりと、激しく吹き付ける。唐突に、上昇気流が巻き起こり、飾池に波紋が渡る。

「え……………」

春一番とはとても思えぬ一風変わった風に小羽は空を見上げる。ざばざばざば、と葉々が巻き上がり、空へ吸い込まれてゆく。

影が僅かに見えて小羽は眼を細める。

車輪だ。繋がる二つの車輪に人の影。ちょうど自転車に乗っているような影がゆつくり降りてくる。

「ひと……………」

それを確認した瞬間、再び風が巻きあがり、小羽は眼を閉じた。頬をなげる風が僅かに痛い。

なに、これ……………。そう呟く間もなく、風は止まり、眼を開いた小羽の視界には自転車があつた。

黒の網金で出来た古いもので、庭のちょうど中心に現れている。しかも、ヒトが乗っていたので小羽はひどく驚いた。

深めに被った藍色の制帽。同じく藍色の、一見明治の公務員の制服に見えなくもない変わった服。肩には白のショルダーバッグがかっている。

「ありや、着地場所間違えたな。此処は……………庭か？」

第一声は、驚きだった……………。

続

第陸話：郵便屋

またしても、摩訶不思議な出来事が小羽の前に現れた。それはまるで御伽噺のようにも見える、臃気な現……。

涼やかな風を従え空から降りてきたのは自転車に跨った制服に制帽姿の男。

不意打ちのように飾り庭に出現したその男は、啞然とする小羽を後目に悠々と自転車を立てる。

そして当たり前のような慣れた足取りで邸宅の、今小羽がいる縁側に向かつて歩いてゆく。

その開口に、再び小羽は驚かされた。

「お待たせしましたあ、郵便です」

そう確かに言ってから、男は気さくに笑みをみせる。

(……………あれ?)

その笑みがどうにも見たことがあるようで、小羽は首を捻る。

が、直ぐに我に帰り、小羽は半ば混乱の中でしどろもどろとして、慌てた。

見事な慌て様だと、後で振り返って小羽が己を恥じるのはその少し後のことだったりする。

そんな少女の慌て様に、郵便と言った男も驚いた。だが、それは楽しげな笑いをみせる、軽いものに過ぎない。

「嬢ちゃん落ち着いて。他の方呼んで貰えるかい?」

少し訛りのある独特の発音で、優しく宥めるように制服姿の男は言う。どうやら東北訛のようだ。

「は、はい直ぐに!」

「……………そんな急がなくてもいいのに」

急ぎ足で踵を返した小羽の背に男の訛りが重なる。

だが、小羽が呼びに往くまでもなかったらしい。

小羽が走り出した刹那に手近な襖が開き、二人の男と一人の少女が現れたからだ。

「おいおい、そんな急いでどこ往くんだ？」

そう言っただのは八雲だった。呆れたように、しかし楽しげに笑っている。

その笑みに、小羽は類似の念を重ね合わせる。それがよくわからないのだが、どうにも心の端に引っ掛かり落ちてゆかない。

「こんにちは、雲介さま。ご苦労様です」

そう相変わらず淡々とした様子で労うのは鈴だ。手には三通書状が携えられてある。

「おう、相変わらず別嬪さんだなあ鈴ちゃん。有火の旦那と兄貴も変わらない様子で」

明るく言って男は制帽を取り払う。

そこでようやく小羽は自分の胸に引っかかっていた疑問が解消された。

「八雲さんにそっくり……」

目深にかぶっていた制帽がはずれ露わになった彼の顔は、今隣にいる八雲に酷似している。

髪の色は淡い茶だが、瞳は八雲と同じく黄色かった琥珀色だ。

身長や体格は八雲より高く、彼の方が幾分も若いようだったが、やはり似ている。

「そりゃあな、こいつと自分は兄弟なんだよ。少しは似てるだろ？」

かか、と笑って八雲は弟の頭を叩く。

「雲介さま。これをお願いします」

その兄弟のやり取りを無視して鈴は三通の書状を雲介に渡した。なぜかイライラしている様子だ。

「はい、確かに預かりましたっ」

達筆な筆字でかかれた住所を確かめる。

まだ年端の往かない少女（見た目）の書いたとは思えない、洗練された毛筆字。達筆すぎて小羽には読めなかった。

さて、以上で？

鞆に書状を収めてから配達屋は向き直る。

「もう一つ頼みたい。少し待っていてくれ……」

これは有火だった。

有火が”品物”をとりにかく間に八雲はのんびりと調理場へ、鈴はキビキビと上階へ消える。

そして縁側に残された小羽を何故か雲介は仕切りにを見つめていた。その目にはどこか関心したような興味深そうな、知識欲が見え隠れしているように思えて、小羽は目を伏せる。

その様子に、しまった、と思い慌てて雲介は言う。

「ごめんなあ。ただ、あんまりうまくヒトに化けてるから関心して」
訛りのある朗らかな言葉に、首を振って小羽は顔をあげた。

「私は……」

妖ではない。

そう言おうとして、はたと喉元まで押し迫った言葉は留める。

この場所では自分が異端なのだと、小羽ははつきり自覚した。

たとえば彼らがヒトの姿形をとっていても、彼らはヒトではない。

妖だ。

そして、自分は人間。

そこにあるのは大きな違い。彼らは優劣で小羽を見ないが、やはり此の場所は自分が居るべきではないのだろうか……。

「嬢ちゃん？」

深刻そうに黙り込んだ小羽の顔を心配げに覗き込む雲介の顔が目の前にあった。

「あ……あの……私……」

もう一度、あの言葉を言おうと決めた瞬間に、高い影が小羽の隣にたつ。

落ち着いた色合いの袴に薄い羽織りを完璧に着こなした、深い緑の髪の男。戻ってきた彼の手には、朱の紐で封された桐の箱が携えられている。

「……雲介。小羽は妖ではない」
相変わらず低い声で有火は告げる。

「ヒトの娘だ」

それを告げられた雲介はさぞ驚いた　訳ではなく、得心がいったように手を叩いていた。

「なるほど、ヒトかあ！　確かにそれなら霊力がまったく漏れないのもわかる」

うんうん、と、問題がとけたように雲介は頷く。

無論、小羽にはまったく理解出来ていないが。

「我々の力の源は俗称を霊力というのだが、我らがヒトに化身するときは必ず霊力を用いる。故に必ず霊力が多少なり溢れてしまう。妖はそれを感じられるから、まったく霊力を感じないお前を奇妙に思ったようだ……」

意味が解らない様子の小羽の耳元で有火は一気に説明する。量が多くていまいち伝わらなかったようだったが、要点は理解できた。とにかく、自分には霊力とかいう力がないから奇異に感じたのだ。小羽はそう理解することにした。おそらく間違いではないだろう。「はああ……。にしても珍しい。怪奇現象屋の若旦那とこのヒトら以外にこの屋敷に居るとはなあ」

「……怪奇現象屋？」

「想也の若旦那がやってる店ですよ。あつ、有火の旦那、荷物預かりします」

律儀に小羽の呟きに答えてから、雲介は有火の持つ桐の箱を受け取り肩掛けの鞆に丁寧にしまいこむ。

箱に何が入っているか気にはなったがかぶりを振って考えるのを

止めた。

訊けばおそらく有火は答えるだろう。

だからこそ、訊くのは止めよう。詮索はいい結果をもたらさない。小羽の短い生涯に刻まれた処世術に近しいものだ。

「さあて、じゃあ僕は失礼します。こっから酒華の姐さんのところまで結構あるんでなあ」

再び制帽を深くかぶりなおしてから雲介は軽く礼を見せる。

「ああ…。頼む」

「はい。じゃあ花見にや今年も顔出しますね」

彼の履き物が敷石を響かせる。

小羽はいま気付いたが、彼の履き物は編み上げ靴のような頑丈そうなものだ。

ちりん、と甲高いベルの音が一つと高く鳴った。

それに続き、春風が強く吹き付けて、彼を載せた自転車を巻き上げるように走ってゆく。

ちりん。

ちりいいん。

巻きあがる風に視界を閉じていた小羽が、吹きやんだ風に目を開けると既に雲介の駆る中古のような自転車は高く舞っていた。

春風を纏い、こうして郵便屋は走っていった。

続

第陸話：郵便屋（後書き）

八雲さんの弟、雲介くん登場。外見年齢は22〜25くらいだと思います。彼が老ければ兄にそっくりになります。服装は明治くらいの警官さんをイメージ。趣味です。

第漆話：花見 前

晴れ渡った春空の下、二人の男と一人の少年と一匹の黒猫が歩いていた。

麗らかな暖かい一日になることを予期させる晴天から感じさせる陽気に彼らの眼は知らず知らずに並木を眺める。

枝垂れ桜だ。日本でも数の少ない桜だが、この路には平生のように立ち並び、美しい花弁を散らしている。

今日は絶好の花見日和だ。口には出さないが、彼らは皆、そう思っていた。

++++

それは、庭の桜が綻んだ日のことだ。

藤色の作務衣に白髪の子、八雲は山芋をすり下ろしながら、格子窓から見える並木を眺めていた。

「きれーに咲いたなあ」

そう呟くと厨房で働く面々もそうですね、と口々に言った。

「桜見ながら花見酒といこうか。昨日いいの買ってたなあ」

そんな他愛もない話で花見に思いを馳せつつも彼らは次々と作り上げていく。

旬の野菜に山菜。

筍。タラの目。わらび。

「あれ……、八雲さん。この花って……」

籠にこんもりとあげられた瑞々しい新鮮な野菜（山菜）のなかに路でよく見かけるものを見つける。

「ああ。それは”ばっけ”だな」

「ばっけ？ 路の薑ふきのとうじゃないんですか？」

「路の薑だよ。方言でばっけっていつてな。花がさくまえのを天ぷらにすると旨いんだこれが、ほんのりと苦みがあつてな」

そう言つて八雲は”ばっけ”に衣をつけて油へ投入する。

ぱちり、ぱちりと衣が爆ぜた。

「じゃあこれも食べるんですか…？」

「土筆つくしか？ これもなかなかイケルぞ」

春の山菜には多岐に渡る種類がある。

そういつた知識の乏しい小羽は常に新鮮な驚きを感じていた。

八雲の話ではこれらの野菜らは朱波近隣の山で採れるらしい。

『今の現世ではあまりそういう所は無くなつたなあ』と、八雲が淋しげに呟いたのが小羽には深く印象づけられた。

この場所は確かに不便だ。

電気も、車も、コンビニも無い（あつたとしても小羽は一度もコンビニに行ったことは無いが）。

小羽は思う。

此処は澄んでいる。色々なモノが。

あの部屋から見ていた空も、ここではまるで違う。あそこでは星は全く見えない。それだけでも大きな違い。

吹く風も、咲き誇る花や生い茂る草も。

歌う鳥や流れる川も、ここに住まう彼らも、小羽が居た世界とは比べモノにならないほど、綺麗だ。

だからこそなのかもしれない。

己のような存在がこの世界に居ていいのか……。不安と、どこから責める疎外感が小羽を苛む。

汚れた世界から来た汚れた自分は、彼らには迷惑ではないのか。それすらも、世界を汚すヒトのエゴだと、小羽の心は囁いていた

。

落の臺の天ぶらの味を想像しつつ、作業は進む。

本日は前々から予定されていた花見の日。

この花見は毎年行われているらしく、朱波の住民たちも幾らか参加するという。

この日は屋敷の上下関係も無視する無礼講だとも八雲は言う。

「花見ったらやっぱ酒だな、うん。弁当も出来たし、完璧だ」

筍飯を漆塗りの高そうな重箱に詰め終えた八雲はなんまり笑って一升瓶を掴む。

荒々しい毛筆で『雲漆』とかかれた清酒だ。たぶんと内に満たされた酒が己を飲めと誘う。

「さて、会場も準備出来ている頃だなあ。小羽、ちよつと見てきてもらえんか」

八雲は浮き足立っていた。顔がほころんでいる。目尻に皺のよる、人懐っこい笑みだった。

「はい」

袖を留めていた紐を取り払う。今日の小羽の着物は何時もの簡易なものではなく、しっかりとした振袖だ。浅い紅の生地には白抜きの桜の花弁が栄える美しいもので、今朝方鈴が僅か数分で着付けてくれたのだ。

その時の鈴はやはり無表情で、一瞥すらくれなかった。そこに、小羽の不安がチクリと痛む。嫌われているどころか、無視されているらしい……。

会場もまた見事なものだ。

枝垂れ桜の古木が枝を重ね合わせる、薄桃の舞台。時折吹く風が枝を揺らせば、花弁は桜吹雪となって視界一杯に美しく散る。

その特等地に敷かれた紅の敷物。立てられた日傘。肴をあぶるための七輪。

完備された花見舞台。それを準備していた人々は一息ついて談笑している。

「おつ、小羽ちゃん。どつたの？」

煙管をふかしていた男が小羽に気づき声をかける。

有火の屋敷には多くの妖が働いている。彼らの大体は気だてのいい親しみやすい者だ。小羽を見かけると軽い挨拶をかけてくれるし、時折他愛のない雑談もしたりする。

「厨房はいいんか？」

「はいつ。もう料理は作り終わってて、こちらの様子次第で始められるそうです」

「そうか。じゃ、小羽ちゃんも一休みするかい？ 立ちっぱなしでキツイだろ？」

「お茶もあるぞー」

「あつ、こら抜け駆けすんなつ。あ、団子食べるかい？」

「あぢつ、茶が零れるっ」

大の男たちが争う。

微笑ましい光景だ。少なくとも小羽にはそう見える。彼らは真面目に小羽を労っているのだが、どうやら争奪戦のようになってきている。

「駄目ですよ。お茶もお団子もお花見用です」

くすりと微笑み、やんわりと咎める。

久方振りに、小羽は笑った。悩みばかりの毎日に、本当に、心からの笑みを見せて。

その向日葵の微笑みに、彼らは諍いを止めて笑いを見せる。

「笑った小羽ちゃん。始めてみたよ」

「俺も」

この屋敷にきて数週間ほど。

小羽は仕事を覚えようと必死で、それこそ見ている彼らが心配になる程働いていた。

ひたむきな姿勢。疲れた表情は隠していたが、やはり肉体的には疲弊してゆく。

そんな小羽を屋敷で働く者たちは好意的に見ていた。

だからこそ、小羽が見せた心からの微笑みが彼らにも嬉しかった……。

「やっぱり可愛いなあ、小羽ちゃん……」

「ああ……可愛いし、一生懸命だし、ほんといい娘だよなあ……」

小羽は優しく一瞥して屋敷に戻っていった。その背を眺めてぼんやり彼らは呟く。

花見の準備は整っていた。

++++

花の雪がひらりと風に踊る。

花卉を掌に受けて、季杉想也は鳥居をくぐった。

朱の鳥居の向こうには和風の偉く豪華な屋敷が佇む。山道の中に

在る屋敷の周囲や路のあちらこちらに霞のように花卉が舞う。

「着いた。風、疲れてないか？」

そう言つて振り返る彼の背後には特徴的な容姿の幼い子が歩いている所だった。

赤地に金メッシュの入ったかなり人目を引く色合いの髪。ややつり目の双眸は金。まだ十にも満たない少年であつた。

風と呼ばれたその子供はコクリと頷く。疲れていない、という意味表示だ。

「お、着いたんやな」

風の背後で関西訛が響いて、それに続くように男が歩いてきた。やや逆立つた金髪に左耳には銀のピアスが光る男だ。顔は美形の部類に入るだろう。

服装はやや大きめなカットソーを着た風とは対称的に薄い矢羽柄の着流しを着ている。ただし履き物はなぜかブーツだった。

「んあー……、流石に山道は疲れる」

「だらしないですよ景都さん」

「しゃあないやん。わい運動苦手なんや」

軽く体を伸ばして金髪の男は歩を進めた。目的地は直ぐそこだ。

言つてしまえば派手な外見の二人に対し、想也の外見はごくふう。

短めの黒髪に焦げ茶の瞳。服装は黒のカジュアルジャケットにジーンズ。純日本人の、極々ふつうな青年だ。歳は若く、高校生くらいか。

背負っているザックを直し、二人を促して想也は歩を進める。そんな彼らの前に、チリン、と銀の鈴が響く。

しなやかな動きで先頭を走る黒猫。歩く度に赤い革ベルトの首輪に付いた鈴が愉しげに鳴いている。

黒猫は楽しそうに跳ねていく。

「こら銀河。先行つてもいいけど迷惑かけるなよ」

春の陽気に気分が高揚しているのか、黒猫は一直線に屋敷へ走っていく。その後を追うように、彼らも屋敷へ向かっていった。

++++

「久しぶりやな有火。元気やったか？」

明るい関西弁が響く。

風と銀河を先に花見会場に往かせ、想也と景都は有火の屋敷に向かった。

屋敷の主は彼らが来るのを察知してなのか、正門の懐にある簡素な長椅子に腰掛けていた。

「久しぶりだな……。お前が来るとは思わなかったぞ…景都」

「たまにはなあ、親友の顔くらいみると。忘れられちまうやろ？」

「……お前は相変わらずだな。……想也もよく来てくれた」

銀の双眸を想也に向けて有火は頷く。

この男は笑顔が苦手だ。故に多少なりとも彼の印象を鋭いものに変えてしまう。

「ん、有火も元気そうだね」

「相変わらずおっかない顔してるわー。もちっと柔らかくならんのかいな、わいみたいに」

想也の挨拶に景都の軽口が重なる。

「…燃やすぞ」

「ひどい！ 怖いなあ。とまあ、久しぶりにあつたんやし積もる話もぎょーさんある。花見往こうや」

軽妙な景都の話術には聴いていてどこか心地良いものがある。

相変わらずな友人を前に有火も苦笑を呈し、腰を上げた。

「花見の席はこっちだ」

からん。有火の履く高齒の下駄が敷石に軽い音を刻む。

少し遅れて花見会場に付いた三名を愉しげな喧騒が迎える。始まって間もないためまだ酒には手をつけず、皆雑談や料理に舌鼓をうっていた。

「おうおう、やっとなるな」

「今年もいい桜だ。」「こっち」とはまるで違うよ」

想也の比喻う言葉をすり抜けて景都は我先にと藤色の背に向かっていく。あの背は八雲だろう。

「酒びだしめ」

ため息混じりの皮肉を漏らす想也。どうやら彼らはすでに酒盛りを始めているようだ。

「…おまえは呑まないのか？ ヒトの年齢でも飲酒できるだろ？」

「あんまり強くないんだよ。顔のせいで未成年に見られて酒買おうとすると補導されるし……」

どう見ても二十歳にも満たないであろう顔立ちで想也は苦笑をみせる。童顔、にしてもあんまりだろうが、彼は既に成人式を迎えていた。

「さて、俺らも往こう。けっこう腹減ってるんだよ。ここ来る前に一仕事したから」

「ああ……」

花見はまだ、始まったばかりだ。

続

第漆話：花見 前（後書き）

新キャラ続々なので整理。まず景都さん。読みはケイト。外人みたいな名前ですね。金髪にピアスにブーツに着流し。完璧作者の趣味です。続いて想也くん。フルネームは季杉想也。読み方はキスギソウヤ。高校生くらいにしか見えませんが二十歳はいつてます。彼は全キャラで最も最初にできたキャラで、複線と秘密の塊です。因みに闇狩りにも出演予定。最後に風くん。読み方はフウ。十に満たない、と本編で描写してありますが、あくまで見た目です。

第捌話：花見 中（前書き）

今回はキャラクター同士の掛け合いと出会いを主軸にしています。花見はまだ続きます。

第捌話：花見 中

香る酒の香氣に季杉想也はため息をはく。

「ぷはあー！ いい酒だあ」

ほろ酔い気分の八雲は空になった杯に並々と清酒をつぐ。そのすぐ近くには一人で相当量の燗をあけている景都の姿があり、想也は呆れの隠ったため息をついた。

「花見なんだから桜視ろよ……」

「んああ？ なんか言ったかー」

「……………」

「うら、お前ものめよ。一応人間でも酒のめる歳だろーが」

「俺はいいですよ。弱いし」

「なに言ってるんだ若いもんが！ ほらのめええええ……」

「ちよつこら。八雲さんいい加減にしないと”粉々”にしますよ」

酒の満ちた杯を押し付ける自分より幾らも生きている男に想也はため息を吐く。

そんな彼らの近くでは景都が一人で何本も燗を空けていた。顔にはわずかに朱みがさしていた。

「のめ、そーや。年上がすすめてんやぞー」

のそりと景都が動く。想也の鼻に酒気がつく。

「景都さん。……………飲み過ぎだろ」

彼の背後には転がる大量の燗。一人であれほど空けるとは、正直想也は呆れを通り越して驚いていた。

「細かいことはきにすんな。のめ！」

「せや、のめ」

「……………」

息の合った二人の追撃に想也は仕方なく杯を受け取る。つん、と甘い香氣が鼻を刺激する。

「一杯だけですよ」

険しい顔で釘をさしてから想也は杯に口をつける。そのまま一気に傾けると甘みのある強い液体が想也の口内を泳いだ。

正直、キライな味ではない。甘みもあり、辛みもある。

だが、それが喉を通った時、炎に変わった。

かあっと熱く焼けるような喉にクラクラする頭。

「」

強烈なアルコールに体が一気に熱くなる。ついでに頭もクラクラと視点を変えていく。

「無理、やっぱ」

「あつ、想也どこいくんだ」

「五月蠅い……」

言い捨て、想也はふらりと立ち上がる。春風が心地よい、麗らかな日であつたはずが、今の想也にはあまり関係がない。

とにかく、想也は立ち上がってふらふらと酒の席を離れた。

++++

甘い、甘い、団子。

トロリと輝く、琥珀色の甘辛いタレ。七厘で軽く炙られ、香ばしい湯気を立ち上らせる玉。

それに串をさしてタレに潜らせればみたらし団子の出来上がり。

「……いい匂い」

赤髪に金のメッシュという人目を引く容貌の幼い少年はじいっと皿に盛られたできたての団子を見つめている。その瞳は金の色を持っていた。

「どうしたの？」

不意に隣から声がして少年は振り向く。

狐がいた。ふさふさした体毛にピンとした三角形の耳、市松模様の着物から飛び出す尻尾。確かに狐だった。『妖狐』と呼ばれる妖である。

その妖狐は細い狐目を少年に向けて首を傾げている。背だけはほとんど変わらない。

「……………お団子」

ぽつり、少年が殆ど呟くように言った。金の瞳は伏せている。

「食べたいの？」

狐の問いに少年は頷く。その仕草をみて狐は手を皿に伸ばした。金茶の体毛がある、狐の手であった。

「はい」

狐の手が器用に皿を捉える。

いいの？ といったげな少年の表情に狐はうんと頷いた。

「このお団子作ってるの、ボクの兄ちゃんなんだ」

狐の手が串団子を一本つまみ上げる。少年の目はそれを追っていた。

「はい、どうぞ」

「……………ありがとう」

甘い、甘いお団子。温もりが口で溶けていった。

「……………おいしい」

「よかった。キミ、妖…だよね？」

「……………」

「あの、名前、教えて？」

「……………風」

「風くん？ ボクは……………嵐」

ぞぞぞぞぞぞぞぞぞ

サクラの花弁が強い風に舞い落ちる。

「よお……風」

ふらりと、頼りなげな足取りで現れたのは想也であった。顔はやや青ざめている。

「ん、団子？ どうしたのそれ」

「あ、あの」

「ん、狐くん？」

嵐の姿をみても想也はとくに驚かない。逆に笑みを見せていた。

「この子から貰ったのか？」

問いに頷く風の頭を想也は撫でる。

「そうか、よかったな風。」

視線を嵐に戻し、想也はかがみこんで嵐の視線にあわせた。

「ありがとうな。この子無口な上に人見知りしてさ。仲良くしてやつてくれ」

くしゃくしゃと嵐の茶金の頭を撫でて想也は立ち上がった。

「ね、俺も一本もらっていい？」

「う、うん」

「有難う。俺は季杉想也」

「あの……嵐……です」

名前、というものには、昔から意味と力を持つ大切なものとされていた。

想也は一瞬だけ、かすかに驚いた表情をみせたが、直ぐに笑みに戻っていた。慈しむ、優しい笑み。

「嵐か……。いい名だね」

酔いは、消えていた……

++++

「小羽姉ちゃん」

下駄の音が走る。続いて幼い声だ。

小羽は桜の木の元にある長椅子に腰掛けていた。膝には瑞々しい桜餅の皿。他にもわらびもちやお団子、巻物、お茶、焼きそばなどが小羽の隣りに並んでいる。

「嵐さん、来てたんですか？」

声と音の主は嵐だった。依然と同じく、市松の着物からはふさふさの尻尾が覗いている。

「うん」

駆け寄ってきた嵐は嬉しそうに頬を蒸気させている。この狐の少年は表情豊かだ。くると、よく回る。

「ちょうどよかった。これ頂いたんですけど、一緒に食べませんか？」

長椅子に所狭しと並んでいる花見の料理や菓子に視線を向けて小羽は困ったように微笑む。

これらはみな屋敷で働く者たちが持ってきたものだ。

こんなに貰えないと言う小羽を押し切り、彼らは笑顔であった。

「凄い……」

「私だけじゃ食べきれなくて……残すのは失礼ですし、手伝ってもらえませんか？」

焼きそばと綿飴をずらして嵐の座れるスペースを作った。嵐は素直に腰掛ける。

「嵐さん、嬉しそうですね」

綿飴を食べる狐の少年に小羽は微笑む。

嵐は子供らしく頷いて応えた。声も明るい。

「友達、できたんだ。風っていう子。同い年なんだよ」

それとね。嵐は嬉しそうに続ける。

「想也さんに名前ほめられたんだ」

「想也さん？」

「うん」

綿飴をもう一口頬張る。ふと、嵐は綿飴をもった手を振った。その先に小羽は視線を送る。

歩いてくる、二人だ。一人は小羽と同年ほどかと思われる黒髪の青年はカジュアルジャケットにジーンズ姿。もう一人は赤に金メッシュの幼い少年で彼も洋服だ。

小羽はだいぶ久しぶりに洋服を見た気がした。

「こんにちは」

「あ……、こんにちは」

青年の挨拶に小羽は応える。

「小羽姉ちゃんっ、このヒトが想也さん！」

隣りで嵐が言う。鼻に綿飴の切れ端がくっついていた。

「季杉想也だ。話には聞いてるよ。異世で唯一の人間の女の子だってね」

「あなたが季杉さん……。怪奇現象屋の……？」

「俺のコト聞ってるの？」

「あ、はい。少しだけ」

「そう。って風。いつまで隠れてんだよ、挨拶くらいしなよ」

呆れた表情を足下に向ける想也。彼の陰に赤髪が見え隠れする。

「こいつは風。人見知りするから気にしないでくれ」

それだけ言っただけで想也は上辺を仰ぐ。

「花火日和だ」

「はい。……あの」

「ん？」

「その服装」

「ああ。俺と風は 狭間 から来たんだ。俺は君と同じくヒトだよ」
意味ありげに含み、想也は焦げ茶の瞳を桜吹雪に泳がせる。

「ん？」

桜を写していた想也の視界に人影は入る。

「女の子か」

古い桜の木影に佇む、淡い陽色の振袖を身に着けた、銀の髪の少女。

「花見客ですか？ でもなんであんな隅に？」

想也の視線を追った小羽の疑問符が想也の耳に届く。

「話してみれば？ 歳も近そうだよ」

ひょいと長椅子から桜もちを拾い上げ、口に運びながら想也が言った。

「うまいなこれ」

++++

はあ。少女の口から自然とため息が零れる。

「いないのかなあ……」

両の手に大事に抱えた、薄い鶯色の包みでくるんだ重箱。

「……………」

ふと、少女は顔を上げる。

自身と同じ、少女が居た。

「あ、あの……、こんにちは」

「えっ……あ、こんにちは」

「えと……小羽といいます」

「調しらべです」

たどたどしい自己紹介だ。調は苦笑する。

「あの……なにかご用でしょうか」

調は俯く。

「い、いえっ、ちょっとお話したくて」

「お話……？」

「はい。あ……、迷惑でしたか？」

「そんなことっ………ないです」

「………ヤバい食い過ぎた」

「想也さん。甘党なんですネ」

「………甘い」

続

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6537d/>

妖恋～奴隷少女と狐面～

2010年10月11日06時16分発行